

第2回農福連携等推進会議 議事要旨

1 日時：令和元年6月4日（火）17:30～17:57

2 場所：官邸2階小ホール

3 出席者：

（政府側）菅内閣官房長官、根本厚生労働大臣、吉川農林水産大臣、西村内閣官房副長官（衆）、野上内閣官房副長官（参）、杉田内閣官房副長官（事務）、青木内閣官房内閣審議官（内閣官房副長官補付）、名執法務省矯正局長、今福法務省保護局長、丸山文部科学省大臣官房審議官、北條厚生労働省職業安定局雇用開発審議官、橋本厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長、光吉農林水産省大臣官房総括審議官、室本農林水産省農村振興局長

（有識者・敬称略）且田久美（株式会社九神ファームめむろ取締役（エフピコダックス株式会社 障がい者雇用責任者））、小池邦子（社会福祉法人花工房福祉会理事長）、佐藤康博（日本経済団体連合会農業活性化委員長）、城島茂（TOKIO）、新免修（山城就労支援事業所「さんさん山城」施設長）、鈴木英敬（農福連携全国都道府県ネットワーク会長）、鈴木緑（京丸園株式会社総務取締役）、中村邦子（社会福祉法人白鳩会常務理事）、中家徹（全国農業協同組合中央会会長）、皆川芳嗣（一般社団法人日本農福連携協会会長）、村木厚子（津田塾大学総合政策学部客員教授）

4 議題：農福連携等の推進について

5 議事概要

○農林水産省光吉総括審議官から「農福連携等推進ビジョン」（案）について説明。

○有識者より以下のご発言あり（以下、要約）

【鈴木緑氏】

- ・障害者が変わるのでなく農業現場が変わるという取組のもとで、ユニバーサル農業を展開している。
- ・農業で雇用することがなかなか難しい中で企業との取組も進めており、浜松市が誘致した農作業を請け負う特例子会社に農作業を委託した8軒の農家は、軒並み増収・増益で、規模拡大を実現しており、雇用ができない農家にはこうした取組も必要。
- ・特例子会社で働く人がジョブコーチ的な役割をしている現状があるため、農業現場で役立つジョブコーチも必要になってくると思う。

【且田久美氏】

- ・先日、北海道、長野、茨城で農福連携に取り組む各事業所を回ってきた。以前は作業所で工賃月額一万円で働き、支援をされて来た方々が、現在はほ場でたくましく日焼けして働いており、とても誇らしい気持ちになった。
- ・モデルケースになり得る農福連携事業所の創出には、ハードルがたくさんあるかと思うが、既に関心を持っている自治体や企業もいる。私自身、農福連携に取り組む主体の創出に協力していきたい。

【新免修氏】

- ・現場においては、農業に携わる障害者、また、障害者を支援する支援員、双方の人材不足が課題。
- ・特別支援学校や農業大学校での学びも重要。しかし、それだけでなく、農福連携を学問の一つに押し上げ、例えば4年制大学の中に「農福連携学部」のようなものを設置し、多くの障害者がそこで学べる機会を創出し、また支援員を目指す側も介護福祉士や社会福祉士のように「農福連携の国家資格」みたいなものがあれば、そこで学びたいと思う人も増え、農福連携の取組は一気に加速すると思う。

【中村邦子氏】

- ・農福連携等推進ビジョン（案）は、様々な観点から検討されており、方向性が示されている。
- ・現場にとっては、福祉の広がり、農福の広がりを実現するためには関係者の連携体制に係るノウハウを蓄積していくことが重要。
- ・過疎地や農村地域の活性化、障害者の就労や雇用の機会、技術指導の機会の創出等の分野は、施策の推進が十分ではなく、自治体の調整等における役割が大変重要である。推進の実現に向け国から自治体へ強力な指導、助言をお願いしたい。

【小池邦子氏】

- ・私のところは、県や民間との連携についての組織的な仕組みができつつある。ただ、これを広げていくとなると、小さな事業所等においては、ほ場に支援員が出てしまうと、残った障害者を支援する職員の数が国の配置基準を満たせないことから、外に出かける農福連携の取組ができないところもある。
- ・障害者施設では、障害者支援はできても農業技術の習得は難しく、取組ができないところがあり、どのように職員が農業技術を学んでいくかも課題として検討していかなければならない。

【城島茂氏】

- ・福島の高齢農家に話を聞いてみると、田んぼを広げようにも経済的に余裕がない、体力的にも無理があるというのが実情であった。
- ・今朝、神奈川県城ヶ島へ行ってきたが、沿岸部の磯焼けが問題となっており、その対策として、ウニの陸上養殖をやっていた。水産業で陸上での養殖は、漁に出るよりは障害者にとって作業的には可能性があり、今後の農福連携の発展の可能性を感じた。
- ・今後も、テレビなどの仕事を通じて、全国の農家や漁業者の生の声を聞いて、色々と発信できればと考えている。

【中家徹氏】

- ・農福連携等推進ビジョン（案）は非常に分かりやすく整理されており、改めて JA グループの果たすべき役割は非常に大きいと認識した。
- ・現在、農福連携に取り組んでいる JA は、全国で約 50 にとどまっており、農福連携を広げるために、優良事例を横展開しながら、裾野を広げていきたい。
- ・具体的な取組に当たっては、マッチングやコーディネーターの役割が非常に重要であると考えている。自治体とも連携し、農福連携の取組を啓発していきたい。

【佐藤康博氏】

- ・農福連携の推進は、あらゆる人々の活躍の促進や、農業の持続的な発展など、いわゆる SDGs 達成の観点からも、非常に意義のある取組。
- ・農福連携等推進ビジョン（案）を広く共有して関係者が一体となって取り組み、国民の機運を醸成することは何よりも重要。
- ・経済界としては、農業の成長産業化に向けて、従来から種々のサポートを行ってきたが、農福連携についても、既に各社が実施している先進的な好事例を会員各社に横展開することにより、推進していきたい。
- ・行政や農業界とも連携しながら、販路の拡大などを行うことで、今後も、各企業の農福連携の取組を加速化していきたい。

【鈴木英敬氏】

- ・農福連携等推進ビジョン（案）には前回会議の内容が全て盛り込まれている。
- ・農業版ジョブコーチの育成がキーポイントだと考えている。
- ・農業版ジョブコーチは、障害者の特性に応じた農作業の割当てや、農業の専門的知識や技能が必要なため、普通のジョブコーチと異なる研修の仕組みが必要。
- ・例えば、国が農業版ジョブコーチの研修・認定のガイドラインを作り、農林水産研修所に新たに整備する施設で、ジョブコーチの指導人材育成のための研修を行うとともに、その指導人材を活かして都道府県等が国のガイドラインに沿って一定水準の研修を実施し、修了者を都道府県知事が農業版ジョブコーチとして認定する。

- ・このような国と地方が連携した体系的な仕組みを構築することで、農業版ジョブコーチの社会的認知度を高めて、活動を拡大させることを提案したい。

【皆川芳嗣氏】

- ・農福連携等推進ビジョン（案）が省庁の壁を越えてとりまとめられたことは、大変画期的なこと。
- ・このビジョン（案）において、特別支援学校に言及されたのは大変良いことだが、これまでの農福連携の取組は、個々の特別支援学校の先生方の献身的な努力によって支えられてきた面が大きく、まだ点的な存在に留まっている。どこの地域でも農福連携ができる形で広がっていくよう積極的に進めていただきたい。

【村木厚子氏】

- ・農福連携等推進ビジョン（案）は良い形にまとまっている。
- ・お願いが二つある。一つは、これからの農福連携の推進に当たり、推進会議で各省が共同して進められるような推進体制の構築をお願いしたい。
- ・もう一つは、農福連携を知ってもらうことがまず大切であり、今回のビジョンやデータなど、色々なものを広報できる形にしていくことが必要。

○意見交換において有識者より以下のご発言あり

【城島茂氏】

- ・ノウフクJASに関する記述を拝見した。例えば、消費者はスーパーマーケットに行くと、「トクホ」イコール体に良いというイメージを持つと思うが、ノウフクJASのマークやロゴなどは、具体的にどのように活用されるのか。
- ・例えば、商品に貼り付けるなどして今後広まれば、農福連携の推進がなされていくと思うので、お尋ねしたい。

【光吉総括審議官】

- ・ノウフクJASは、JASマークの規格として、農業者と福祉事業者が連携して生産したものに對しマークを付けるもの。今回、農福連携の取組と併せ、需要側の消費者・国民全体の理解も必要であり、ノウフク商品が消費者にも十分広がるように、推進していきたい。

○光吉総括審議官から「農福連携等推進ビジョン」（案）の取扱いについて構成員に諮られ、農福連携等推進会議として決定することについて、異議なく了承された。

○根本厚生労働大臣、吉川農林水産大臣、菅官房長官より発言。主な内容は以下のと

おり。

【根本厚生労働大臣】

- ・厚生労働省では、「全世代型社会保障」の構築に向け、従来の枠組みにとらわれず、様々な分野にウイングを広げ、議論を重ねてきた。農福連携はその一つ。
- ・障害者の方からは、広がる青空のもと、大地と触れ合うことで、やりがいや生きがいにつながったという声を聞いており、意義のある取組。
- ・この取組をもっと皆さんに知っていただきたい。このため、農福連携の全国的な機運の醸成を図り、その裾野を広げていく。
- ・最近では、高齢者や生活困窮者の方への支援にも、農業を活用した取組が広がっており、こうした取組も進めていく。
- ・このほか、障害者分野では、林業・水産業などにも広げたモデル事業の創設も検討する。
- ・ご議論いただいたビジョンに基づき、大臣政策参与に迎えた皆川氏の実践的な助言も得ながら、農福連携の更なる展開に全力で取り組む。

【吉川農林水産大臣】

- ・先日、浜松市で、京丸園の現場をつぶさに見て来た。特に感じたのは、障害者の方に無理に努力を求めるのではなく、経営者が努力して作業工程を工夫することで、生産性の向上を伴いながら、誰もが取り組めるユニバーサル農業が実現できている。
- ・農福連携等推進ビジョンは、農業面から見た農福連携の重要性に応える方向性を示しつつ、皆様の御意見を結集して作り上げられたもの。
- ・今後、このビジョンに沿って、それぞれが実践していくことが重要であるが、その意味で、各団体からお越しいただいた有識者の皆様からも、自主的な取組を積極的に行っていく旨を示していただいたことを、大変心強く思っている。
- ・農林水産省としても、私自身が先頭に立ち、農林水産研修所における農業版ジョブコーチの育成、農福連携に取り組む農業経営者の生産性向上等の取組を推進するなど、農福連携の推進に全力を尽くしてまいりたい。
- ・鈴木知事からも、ジョブコーチの認定ということを発言いただいたので、ぜひ、政策の中で考えていきたい。

【菅官房長官】

- ・今回までにいただいた多様なご意見も踏まえ、農福連携を強力に推進していくために、農業経営と障害者をマッチングする仕組みの構築、作業をサポートする器具の導入などの障害者が働きやすい環境の整備、農福連携を行う農業経営体の収益強化などを柱とする「農福連携等推進ビジョン」がとりまとめられたことは、大変意義

深いもの。

- ・我々は今、ようやくスタートラインに立つことができた。根本、吉川両大臣におかれましては、今後、このビジョンに基づく施策をしっかりと実行に移してほしい。
- ・官民挙げて農福連携に取り組んでいくため、有識者の皆様には一層のご協力をお願いしたい。

以上